

国内研修 報告書

今回、7月26日から28日まで国内研修制度を利用し、大阪府にあるNPO法人子どもの里、NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝を訪問し、NPO法人釜ヶ崎まち再生フォーラムにて釜ヶ崎スタディツアーに参加しました。

子どもの里とは0歳から18歳まで、障がいの有無にかかわらず、また国籍などの区別なく子どもたちが無料で来ることのできる場所です。2013年度の登録人数は122名で、登録をしていれば来たいときにいつでも来ることが可能です。0歳から18歳までが無料で利用できること、登録をすれば来たいときにいつでも来ることが可能な点が、子どもの家事業の特徴です。留守家庭児童事業(学童保育)は小学校一年生から三年生に限定され、利用料も個人負担となります。大阪市では、1988年より留守家庭児童だけではなく0歳から18歳までのすべての子どもを対象に地域における子どもの遊び場、活動の拠点とすることを目的に子どもの家事業が創立され、子どもの家事業、留守家庭児童対策事業(学童保育)、児童いきいき放課後事業の三つを実施していましたが、2014年、補助金制度を見直す観点から子どもの家事業が学童保育へ移行するという形で吸収されました。この補助金制度を見直すというのは、学童保育では費用負担があるにもかかわらず子どもの家事業では費用負担がないというのは不公平ではないかということも含まれています。しかし、子どもの家事業は貧困家庭であったり、障がいもち学童保育に入れさせてもらうことが出来ない子であったり、そういった子たちをも受け入れる場所でもあります。今後、そういった子たちは取りこぼされてしまうこととなります。子どもの里では午後から夕方にかけて、子どもの里に来ている子どもたちと一緒にかるたをしたり、水遊びをしたりして遊びました。日曜日だったため60人近くの子子どもたちが来ていてとても賑やかでした。子どもたちの中にはやり場のない感情をどこに向ければいいのかかわからず、暴力という手段でしか表現できないのであろう子もいました。ホームレス襲撃事件でも、襲撃をする子は家庭・学校で生きづらさを抱えた子であり、しんどい子です。そういったしんどい子も受け止めてくれるのが子どもの里のスタッフたちで、また、地域としてネットワークをつなげています。家庭に問題があって学校に行けない子がいた場合、その子の事情を地域支援ネットワークでスタッフ、学校など、家庭に何かしら事情があり、しんどい子がいまどういう状況で学校に来れないのか、どういう状況で行動につながっているのかを地域でも知っているそんなネットワークを作っているのが子どもの里です。

NPO法人釜ヶ崎まち再生フォーラムでは釜ヶ崎スタディツアーに参加しました。釜ヶ崎とは、あいりん地区とも呼ばれるところで、西成区にある簡易宿所、寄せ場が集中するところ。この地区には日雇い労働者の方が多く住んでいて、日雇い労働者の高齢化も問題になっています。まず、はじめにあいりん総合センターに行きました。あいりん総合

センターは日雇い労働者の就労斡旋と福祉の向上を目的に設置された施設です。早朝5時ごろより日雇い労働者が集まり、求人活動をしています。私たちがあいりん総合センターに到着したのが正午近かったのであぶれた人がほとんどで、寝ていたり、将棋をしたり、仲間と話をしていたり、自由気ままに過ごしていて、写真で見たことはあってもやはり生身の人間がいるとまったく違う景色に思えました。無関心な人、ものめずらしげに私たちを見る人、何しに来たんだというような感じの人、写真では一場面を切り取られただけでしかありませんが、そこには生身の人間がいて、毎日生活している様子が垣間見えました。炊き出しが行われている三角公園や四角公園にも行きました。シェルターは思っていた以上に窮屈で冷房もなければ、プライベートスペースさえもないような狭さで、ただ寝るための簡素なベッドでした。サポートティブハウス「おはな」では利用している方から直接お話を聞き、かつてレインボーブリッジを作り、その時は他の人ができない重要な仕事をしていて、あちこちから声をかけてもらっていた話など、自分が何をやって、師匠からこんなことを教えてもらったと、自慢げに話す様子がとても印象的でした。

北芝とは200世帯500人規模の大阪府箕面市にある被差別部落の名前です。暮らしづくりネットワーク北芝は部落差別の撤廃とまちづくり活動をしている地域に根ざしたNPO団体です。地域に必要とされるありとあらゆることをしていて、子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまでが地域で暮らしやすいように生活相談をはじめコミュニティカフェ、デイサービスなど活動は多岐にわたります。北芝では、「つぶやき拾い」を大切にされていて、地域における課題は時代と共に変わっていく中で、住民の、地域の声を聴くことを重要視しています。北芝のスタッフは、特定の資格を持っているわけではなく、技術も専門性も弱いけれど、それこそが強みでもあるそうです。技術も専門性も弱いけれど、だからこそ、向かい合うわけではなく隣り合う、住民と同じ目線で寄り添えるスタッフがいるということです。また、楽駄屋という駄菓子屋さんがあり、そこは子どもたちの居場所であり、大人がアンテナを張り子どものニーズに気づくことのできる場所でもありました。

最後に

三日間の研修を通して、授業で幾度となく聞いたネットワーク、コミュニティ、地域資源などという単語がはじめて「そういうことだったのか」と、自分の頭で噛み砕いて理解することができました。今までは単語としての意味は知っているけれども、どこか咀嚼できていませんでした。子どもの里のネットワークや、北芝の地域を囲むネットワークを実際に自分の目で見て、聞いて、感じたからこそ得られたものだと思います。

また、被差別部落問題にしても、釜ヶ崎の日雇い労働者問題にしても私は小さいころから植えつけられたイメージがないために何も知らず、その土地を踏みました。しかし、知っている人にとっては阻む何かがあるように、釜ヶ崎や北芝には負のイメージがあるのもたしかでした。何も知らないからこそ、気兼ねなくその土地のことを知ることもできたことは良いことでもありましたが、何も知らないという無責任さを感じました。とても内容

の濃い三日間の中で、今回大阪に行かせていただいていたら知ることのできなかつたたくさんの方々の思いに触れ、自分自身の考え方を見つめなおすと同時に、今後自分がどうなりたいのかを考えるきっかけとなりました。私自身、子どもの居場所問題に関心があったということもあり、子どもの里や北芝に重きを置いていましたが、その考え方はまったくの筋違いで、子どもの居場所問題にしても、それは親の問題でもあり、社会の問題でもありました。子どもの居場所問題に関心があるからといってその範囲しか見えない視野の狭さではなく、多面的に見ることのできる力を養わなければなりません。この研修で得たことを生かすも殺すも自分次第です。今回研修に行って良かったと終わりにするのではなく、これからが始まりだと思い、気を引き締めたいです。